

# 多文化社会学部における IELTS スピーキング対策に関する現状報告

長崎大学多文化社会学部コーチングフェロー（英語） 片岡 宜子

## 1. はじめに

2014年4月に開設した長崎大学多文化社会学部は、人文社会系の学部であり、高度な学術的専門性と語学力を持つグローバル人材育成を目的としている。そして本学部には、特筆すべき取り組みとしてコーチングフェロー（戦略職員）がおり、授業補助、語学カフェ、英文エッセイ指導などを行っている（註1）。英語コーチングフェローの業務は、授業補助や英語カフェ（註2）の企画から実施、英文エッセイの指導および英語能力試験の準備指導を含む。

本学部は、オランダ特別コース、グローバル社会コース、社会動態コース、そして共生文化コースから構成され、そのうち前者二コースでは半年から一年間の中長期留学を卒業要件としている。学部開設から三年目の2016年度には、すでに30人以上の学生が世界11カ国で留学をしている（多文化社会学部ホームページ[最終確認日2017年1月21日]）（註3）。そのような状況で、英語コーチングフェローが中長期留学に向けた英語能力試験（IELTS および TOEFL iBT）のサポートを開始してから約一年半になる（註4、5）。

本稿は、両英語能力試験のうち本学部生の受験率がより高いIELTSに焦点を絞り、これまでのサポート内容を振り返り、今後ますます中長期留学が本格化する中でより効果的なサポートのための対策と改善案を提示することを目的としている。具体的には、まずIELTSスピーキング・セクションとその評価基準を概観する。次に、本学部生に見られる回答傾向と、サポート内容を詳しく見る。そして最後に、スピーキングのサポートの改善案として「発話の文字起こし」を用いた指導法を提案する。

最後に、本稿は2015年10月1日から2016年12月28日まで筆者が担当した、IELTS および TOEFL iBT のサポート延べ299件（註6）、学部長裁量経費プロジェクト「英語能力試験のための総合的サポートに向けた出題形式の比較」における問題形式の分析（註7）、そして2016年8月22日に筆者が担当したIELTS集中講座スピーキング・セクション（註8）の内容および配布資料を基に執筆したものであ

る。

## 2. IELTS スピーキング・セクションの概要と評価基準（註9）

IELTS は英語能力を測定するための試験であり、専門的な知識の試験ではない。質問は受験者の話を引き出すための促し（prompt）であるため、意見の道徳的正しさや知識の正確さを求めるものではない。そのため受験者は完璧さを求められているわけではなく、母語話者の発話で通常見受けられる間違いについては減点対象にはならない。非母語話者が自身の能力の範囲でどの程度コミュニケーションを試み意思疎通が円滑に行えるかが評価対象になる。具体的には、語彙不足や文法ミスがどれだけ聞き手による理解を妨げるか、どれだけコミュニケーションを積極的に取ろうとするかなど言語使用能力の限界がはかられる。IELTS スピーキング・セクションは三つのパートから構成され、11から14分程度で終了する。以下では、そのスピーキング・セクションをパート別に概観し、次に四つの評価基準を簡単にみる。

### 2.1 IELTS スピーキング・セクションの概要

パート1：インタビュー（3.5～4.5分）：IELTS のスピーキング・セクションのパート1では、受験者の名前の確認やパスポートの確認などが行われる。その後は、好みや体験など身近な内容について、受験者視点から日常会話（small talk）のようなやり取りが行われる。トピックの例としては、子供のころの読書習慣や、どのような本を読んだかなどがある。

パート2：スピーチ（3～4分）：このパートでは、渡されたカードに示されたトピックに沿って、受験者がある一定の時間話すという形をとる。話し終えた後

Describe what you are interested in that you want to learn more about.

You should say:

What it is

When you first started it

How would you learn more about it

And explain why you want to learn more about it.

図1. IELTS スピーキングのパート2の質問例（註10）

は、試験官から追って話した内容について簡単な質問がある。設問カードには、複数の質問から構成されるトピックが書かれている（図1）。準備時間は一分間で、一分半から二分ほど話す。

パート3：ディスカッション（4～5分）：パート3では、パート2に広く関連する一般的な質問が出題される。これまでのパートでは、受験者本人の考えや経験に基づいて話すことが求められたが、パート3は抽象的な内容を含むため、個々人の経験ではなく全般論として話をする必要がある。

## 2.2 IELTSスピーキング・セクションの評価基準

IELTSのスピーキング・セクションでは、以下の四つの基準に沿って1.0から9.0まで、0.5刻みのスコアが割り当てられる。その四つの平均がセクションのバンドスコアとなる。そのため、基準を十分に理解し、全てにおいてある一定のスコアを得る必要がある。言い換えると、四つの基準ともバランスよい方が、高スコアに直結する。例えば、三つの基準において5.5から6.0を得たとしても、「話の流暢さと論理的一貫性」において比較的低い4.0を得た場合、平均バンドスコア5.0から5.5を超えることはできない。

1. 話の流暢さと論理的一貫性（Fluency and Coherence）：「話の流暢さ」は、会話として自然なテンポやスピードであるかによって判断される。言い淀みや沈黙が無くどれだけ長く話続けられるかも評価対象になる。「論理的首尾一貫性」では、自身の意見や考えを根拠や具体例を挙げながら論理的に、かつ分かりやすく伝えられるかが問われる。

2. 語彙の豊富さと適切さ（Lexical Resource）：どれだけ多くの語彙を知っており、かつ正確に使用できるかが評価の基準である。IELTSは英語能力試験であるため、学術的専門用語ではなく一般語彙と学術的一般語彙の適切な使用が評価基準になる。カジュアルすぎる表現や逆に文語体も不適切とされる。

3. 文法の幅広さと正確さ（Grammatical Range and Accuracy）：語彙と同様に、文法もどれだけ多くの構文に関する知識を有しており、かつ正確に使用できるかが評価される。例えば、多くの日本人が間違えやすい動詞の-s（複数形や三人称単数の現在形）などは、英語ネイティブにとっては基本的な文法とされるため、特に注意を払う必要がある。

4. 発音（Pronunciation）：どれほど理解しやすい英語を話しているのかが問われる。受験者は英語ネイティブと同等の能力を求められているわけではない。コミュニケーションを阻害するほどの発音の不正確さがいないかを測られているとも考えられる。

### 3. 学生の回答傾向とサポート内容

スピーキング練習で指摘・改善し得る点は多岐にわたる（表1）。その中から、ここではまずセクション全体をととして本学部の学生に顕著に表れるミスについて触れる。その後、パートごとの対策と注意点を、実際に行ったサポートに基づいて詳しく述べる。

表1. IELTS スピーキングでの Dos and Don'ts (註11)

Dos (積極的に行うべきこと)	Don'ts (避けるべきこと)
1. 質問に答える	1. 質問の内容を理解せずに答える
2. 結論（答え）を先に述べる	2. 質問が理解できていないのに、質問の繰り返し（例 Please repeat the question.）と依頼する
3. 直接的な表現を使う	3. 間接的に答える、結論が後に来る
4. 伝わるスピードで話す	4. 速すぎる、遅すぎる
5. 積極的に話を広げる	5. 短い返答（One word answer）で終わらせる
6. 事実とこだわらず、話しやすい内容について話す	6. 沈黙（3から5秒以上の間）
7. よく知らないことに対しても、思いつく限り話す	7. 同じ単語・表現を何度も繰り返す
8. 質問の意味や単語が分からなければそれを伝え、質問する	8. 自己訂正を何度も繰り返す
9. つなぎ言葉を使用して、順序立てて話す	9. 一つの語や「日本語」にこだわる
10. 言い換える	10. 止められた後も、話し続ける
11. 具体例・説明を加える	11. カジュアルすぎる言葉や文語体で話す
12. 質問、回答の両方の時制に気を付ける	12. 和製英語を使用する
13. コロケーション（連語）に気を付ける	13. 無表情でいる
14. 自信をもって答える	14. モノトーンで話す
15. 笑顔とアイコンタクトを維持する	

#### 3.1 本学部学生のスピーキング練習で頻繁にみられる特徴

##### 3.1.1 発話量と流暢さの不足

発話量の過多または過少が多くの場合問題となる。例えば、パート1では簡潔な回答が求められるが、気づくと30秒から1分近く話していたということはよくある。ただしIELTSで一番の問題となるのは、寧ろ発話量が少ないことである。これは、パート1では「one word answer (Yes /No のみの回答など)」として表されるが、特にパート2と3ではスコアに深刻な影響を与える。

発話量と流暢さが少なくなる原因としては、言い淀みや沈黙、そして自己訂正（self-correction）が挙げられる。何を話してよいのか分からずに話の途中で止まったり、単語、表現そして文法に気を取られ過ぎてスムーズに話が進まないと

いった事態が引き起こされる。自己訂正に関しては、例えば、時制の訂正、主語と動詞の一致、品詞の違いは、間違えたと思い訂正をするのだが、どれが正しいのかとっさに判断がつかずに何度も同じ個所を繰り返すことが特によく見られる。

スピーキングは、四つの評価基準に沿って総体的に評価される。語彙や文法の多様性をアピールするのも大切だが、それよりも発話量を増やし評価対象である「発話」を試験官に提供することを優先すべきである。発話量は流暢さに直結しているため、一定時間内に多く発話するためには言い淀みや沈黙を極力減らすことが肝要である。そのためには、語、句、節、文などの単位で徐々に口慣らしをして、回答例 (sample response, model answer) を一定時間内にスラスラと読めるような練習が必要である。

### 3.1.2 表現力の不足

表現力の不足は、無表情、モノトーン、文末などのピッチ (音高) などによって判定される。無表情だとしても、緊張と相まって抑揚に欠けモノトーンになりやすい。日常の生活でも、表情やジェスチャーなどで発話の情報を補っている。例えば、楽しいことを話しているときには、表情も柔らかくなり、声も弾む。スピーキングのときはあえて表情をほぐし、評価対象にはならないがジェスチャーを交えることによって、声のトーンに変化が出ることが見込まれる。

モノトーンと同じく頻繁にみられるのが、節や文末に見られる上がりピッチである。特に文末でピッチが上がる (または下がらない) のは、一般的に平叙文では発話が終了の終了ではなく継続を意味する。そのため、受験者は話し終えたつもりでも、試験官は話の続きを待っているということにもなりかねない。緊張していると、自身の認識と同等のイントネーションが相手に伝わらないこともあるので、日頃から声に抑揚をつけて話すような努力も必要となる。文末のピッチが気になる場合には、質問文を再度簡潔に言い換えて述べると、「締め」の役割を果たし相手に話が終了したことを伝えることができる。

### 3.1.3 経験の不足

学生からスピーキングの全セクションに共通した悩みとして挙げられがちなのが、質問で問われる事柄を経験したことがない、または考えたことがないというものである。しかしながら試験の性質上事実を述べる必要がないため、作り話で回答してもよい。他人の経験をあたかも自分のことのように語る、または正直に自分には経験がないことを説明したうえで他人の話をしてもよい。とっさに出てこない場合には、「該当しない」旨を表す回答であってもきちんと理由を伴う場合には十分評価の対象となる。

IELTSは専門の知識を問う試験ではないため、質問は曖昧に作られており、

文化的・社会的に異なる背景を持つどのような受験者にも対応できるような内容のみが出題される。そのため、日常的に新聞の見出しやネットのニュースに気を配るだけでもこの問題は解消される（註12）。

### 3. 1. 4 聞き手への配慮の不足

受験者は自身の知識を前提に説明を省くことがあり、このことが試験官の理解を妨げることにつながる。これは、試験官と受験者の間で共有している情報とそうでない情報の整理がうまくできていないことに起因し、発話量不足にもつながる。受発話量を増やすためにも、常に相手を意識し、話し手と聞き手が共有していない情報には説明を加え、その区別が曖昧な場合にはあえて再度説明するのが望ましい。

加えて、試験官は多くの場合英語ネイティブであるが（註13）、受験者は試験官が日本の文化について熟知しているという前提で話をする傾向がある。たとえば試験官の日本在住期間が長くても日本文化に精通しているという確証はない。自分の英語力（特に評価基準の語彙の幅）のアピールの一環として、相手が知り得る情報でも補足を加えると良い。例えば、「タヌキ」は「…*tanuki*, a raccoon-like four-legged animal…」や「お好み焼き」を「…*okonomiyaki*, pancake-like flatbread with meat and vegetables…」と表現するなどが可能である。

詳細な情報を加えること以外にも、聞き手に分かりやすく話す方法がある。例えば、つなぎの表現を加えるのは効果的である。これは、単に接続詞や順番を表す語（例 first, next, after that, at the end）という簡単なものから、因果関係の表現（例 So, This is because…）、強引な話題展開の「By the way」「Anyway」でもよい。聞き手に「目印」を伝えることによって、より明確に事の流れが伝わる。

三つ目に、声量なども聞き手への配慮の重要な要素となる。例えば、日本語の「母音+子音」の音声構造は、あまり口を開かなくても音が出せてしまうため、英語を話す際もその特徴が現れ、結果として聞き手に負担を強いるような不明瞭な発音・発話につながる例が多々見られる。もっとも、個々の音の正確さが必要なのではなく、句、節、文章全体としての理解の容易さが問題となるため、極端な例ではあるが、音はカタカナ発音であっても、単語のアクセント、文章内のイントネーションや重要語の強調などが適切に使用できていれば、音はネイティブ並みでも抑揚のないモノトーンで話すよりも評価されると考えられる。また、笑顔の維持やアイコンタクトも、イントネーションに現れるため、それらを絶やさないことが重要である。



### 3.1.5 語彙と文法の幅

どの程度の語彙が評価対象になるのかの判断は難しいが、バンドスコアや点数別に分類している種類の IELTS や TOEFL 対策の単語集を参考にするとうい(林 & 小玉 2016、萱 & ハッチェル 2015等)。基本的な語彙は、評価対象にならない(形容詞では good/bad 等、動詞では have, get, make, do 等)。語彙の幅をアピールするためにはより具体的な意味を表す語を使用する必要がある。例えば、I got a car last night. の got は「今までなかったものが手元にある」ということを表すため、rented, borrowed, bought, stole などに変えることによって、その状況をより詳細に説明することが可能になる。

語彙力を上げる際の学習で重要なのは、類義語を一式同時に身に着けることである。ただし類義語の違いを認識することも重要である。例えば、訳すと同じ日本語になる語も(例 work/job, preserve/conserve, flourish/thrive)、文脈によってはどちらか一方しか使用できないこともある。必ず英英辞典などを使用し、意味が重複しない部分を確認しておく必要がある。高度な語彙を使用しても、適切な使用でない場合にはスコアに反映されない。

スピーキングは瞬発力を求められるため、緊張も相まって、語彙と同様に文法構造も安易なものに偏り単調化する傾向にある。おそらく一番簡単な解決法は、何度も使用してしまう語の品詞を変えて使用することである。品詞が変わるということは、語彙の幅の広さをアピールすることにもなるうえに、自然と構文も変わるからである。

I am hungry for a slice of pizza.                      形容詞 (SVC + 前置詞)

I hunger for a slice of pizza.                      動詞 (SV + 前置詞)

パート 1 と 2 では個人的な体験に基づいて返答するため、どうしても「私」が主語となりやすいが、文章の主語を変えることによって構文にも変化がでる (1 a と 1 b)。また「私」以外にも、物など無機質なものの主語に使用すると構文の幅が広がる (2 a と 2 b)。

1 a) I let him borrow my phone to call his family.

1 b) He borrowed my phone to call his family.

2 a) I saw a statue in the park.

2 b) A statue was in the park.

文法構文の多様性をアピールする方法に、言い換え (パラフレーズ) がある。一般的にカタカナの「パラフレーズ」と呼ばれるものには、二種類あり、日本語の IELTS 対策の書籍を見ると「語の置き換え (substitution)」の意味で使用されていることが多々ある(田岡 & 小谷 2016等)。ここでのパラフレーズは、「para-

phrase」の意味で、文章構造を変えることによって同じ内容を異なる方法で表現することである。(Bailey 2014; Oshima & Hogue 2006) 厳密には、言い換えることによって構文はもとより、語の品詞が変わり、以下の例では分量も増えている。

置き換えの例：

I went to Tokyo. → I visited Tokyo.

パラフレーズの例：

I love to read, and it makes me happy.

Reading is a passion of mine and books bring joy to my life.

### 3.2 パートごとの特徴と対策

発話の準備時間が設けられているのはパート2のみではあるが、試験からの質問や指示の後には、自然な間を空け話し始めることが求められる。さらに、答えに説明を加える「答え＋a」の形をとりつつ、簡潔に答える必要がある。スピーキング・セクション全体を通して、沈黙や不必要な言い淀みは高スコアの大敵ではあるが、逆に冗長になりすぎると首尾一貫性を失うとともに、質問の範囲から逸脱する危険もある。ここでは、パート毎にスコアを伸ばすための対策を詳しくみる。

#### 3.2.1 パート1：インタビュー

パート1の回答時間は、一問につき10から15秒程度を目安にするとよい。パート3以外は受験者自身に関することが聞かれているので、自身を中心に話を展開する。多くのサンプル質問を含むものや出題されるテーマの出題頻度ごとに質問例を挙げる対策本も複数あるので(Achirri 2015; 田岡&小谷 2014等)、パート1から発話量が足りないということにならないように、日本語でもよいので練習しておきたい。

質問が聞き取れない場合や理解できない場合には、聞き直してもよいが質問自体が短く簡単なものが選ばれているため、言い換えや説明を求めることはできない(Achirri 2015)。ただし受験者に身近な質問であるがゆえに、5W1Hの疑問詞を使用した質問が大半を占めるので、質問の最初を聞き逃さなければ、質問から脱線して話すという危険性も低くなる。そうすることによって、聞かれていることに対して答えるということを実際に行うことができる。例えば、以下の例で3aと3bでは質問に若干の差があるものの、やや聞き逃したとしても返答に大きな影響はないが、4aと4bはまったく別の質問となっており疑問視の聞き



逃しによって質問からそれた回答になる。

3 a) What kind of music do you like?

3 b) What kind of music do you like listening to?

4 a) Where do you go out for a meal?

4 b) When do you go out for a meal?

### 3. 2. 2 パート2：スピーチ

パート2ではまず、試験官がトピックを述べてくれるので聞き逃さないことが肝要である。次にトピックの書かれたカード、メモ用紙、そして鉛筆が渡される。準備時間は一分間なので、最大限活用して話す内容についてキーワードを中心にメモをするといよい。カードに書かれているトピックの内容が分からない、不明瞭である場合には、準備時間内で質問する必要がある。セクション全体にも共通するが、質問の意図を十分に理解せずに回答すると「話の流暢さと論理の一貫性」などのスコアに大きく影響する。これは、受験者が一方的に二分間話をするパート2では、特にスコアが伸び悩む主な原因となる。話す目安は一分半以上となっているが、できるだけ二分間話し続け、試験官に止められるくらいが理想的である。時間配分が厳格に決められているため、二分が経過すると試験官は受験者が発話中でも止めるが減点対象にはならない。逆に話すことに尽き「Do you have anything more to say?」などと言われた際には、分量としても質としても足りておらず流暢さに欠けると判断されている (Achirri 2015)。

設問カードは図1のようなものが渡される。まずはざっと全体に目を通して、何について聞かれているのかを把握するといよい。最初の一文が質問の大まかな内容を記しているが、詳細な内容はそれ以下に箇条書きにされており、疑問詞と「And explain」で始まる指示文から通常は構成される。カードには書き込めないが、手元の用紙に質問ごとにキーワードをメモし、話す際は確認しながら進めると話し忘れがなくなる。

質問の答え方は「答え + a」と考え方は違わず、箇条書きの質問一つをパート1の質問一つと考えるとよい。パート1では一問に対して10から15秒だったので、同じように答えるだけで40から60秒話すことになる。話しはじめでは必ず質問内容を言い換えて (パラフレーズ) して導入とすると良い。加えて、細かな質問への回答の間にはつながりが欠けるので、つなぎの表現や説明を加えると、おおよそ一分半にはなる。ここで重要なのは、答えがどうしても短くなる傾向にある受験者は、すべての質問に丁寧に答えることが話し続ける手助けとなるということである。途中で、カードで聞かれている疑問詞 (5 W 1 H) 以外の情報も加えて話すと、内容も充実し英語力アピールになる。パート2の時間配分は決まってい

るので、長く話すと試験官による追加の質問数が減ることになる。

このパートは「描写」を目的とした設問になっているため、それを意識しつつ、語数を増やし、且つ語彙と構文の多様性をアピールするには、形容詞（5b）、副詞（6b、8b）、比較級（7b）の使用で効果的である。更に以下の5cでは前置詞を使用して情報を追加し、8cでも「どの程度」についてより詳しく説明する情報が補足されている。

5 a) I like cats.

5 b) I like dark-colored cats.

5 c) I like dark-colored cats with short ears and bushy tails.

6 a) I like cats.

6 b) I like cats very much.

7 a) I like cats.

7 b) I like cats more than dogs.

8 a) She is taller than me.

8 b) She is much taller than me.

8 c) She is much taller than me, at least half a head taller.

パート2での難しさは、話し始めにもある。試験官に促されタイマーが進んでいるにも関わらず、どのように始めてよいのか判断できず数秒の沈黙が続いたという経験談が本学部生からも多く聞かれる。それを回避するためには、まず受験者自身が定型文を決めておき、その表現から始めることが最善である。例えば、「I am going to talk about…」などの表現である。ただし、定型文の後続部分についても質問を言い換える必要がある。よく見られるミスは、上記の図1の設問カードを例にすると「I am going to talk about something I had been interested in but have not learned more about it.」などのように、定型文の後に質問文をそのまま使用することである。質問文に使用される表現をそのまま使用しても、評価対象にはならず、反対に自身の英語力をアピールする機会を減らすことになる。なので、定型文を使用する場合でも、自身の話す内容を盛り込んだ表現で始めるとよい（例 I am going to talk about cooking.）。もう少し高スコアを望むのであれば、導入部分から自然に言い換えた表現を使用するとよい（例 I have wanted to learn to cook better.）。

### 3. 2. 3 パート3：ディスカッション

これまでのパートは回答者個人に関する質問が続いたが、本パートでは、より抽象的な問いかけが行われる。設問は、一トピックにつき二、三個のサブカテゴリーに分かれていることが多い（表2）。

表2. IELTSスピーキング・セクション パート3の出題例 (註14)

Transport
What did you use to get here?
When was the last time you used it?
What would you recommend to a person visiting your city?
Education
Should government create a learning program to continue education?
Is specialized knowledge more important than general knowledge?

上記の例のように、抽象的ではない質問がパート3で出題される可能性もあるので、質問を聞き逃さないようにするのが肝要である。例えば、上記の交通機関に関する出題例の中に「What would you recommend to a person visiting your country?」という問いがあるが、より一般的な「What would people in your country recommend to a person visiting your country?」という問いかけであるならば、回答のアプローチはまったく異なる。一般的な質問をされた場合には、同じく一般的な導入で回答を始めるとよい。理想的な回答を図形に例えると、逆三角形(▽)で表すことができる。つまり、一般的なところ(逆三角形の上辺)から始め、説明を加えつつ徐々に絞っていき、最後にその具体的な例を挙げるのである。

上述してきたように、スピーキング・セクションの質問は、ある程度受験者に回答の自由を与えるものになっている。一般的なことを述べるのが困難である場合には、自身でテーマを限定して話を展開するとよい。例えば、「Should government create a learning program to continue education?」という質問であれば、年齢・世代や状況などを具体的に挙げ、それらの場合にはYes/Noということもできる。このような判断はとっさに英語でできるものではないので、日本語で十分な練習を行っておく必要がある。日本語で答えられないものは、英語では絶対に答えられないということを十分に認識しておくといよい。

パート3で一番問題となるのは、パート2のような準備時間がないままに、抽象的な質問に対して即答を求められることである。ここで最も有効だと思われるのは、まずは話しながら考える時間を稼ぐことである。著書によっては、「Well…」 「Let me see…」などの表現をすすめるものもあるが(森川他 2014等)、考える時間としては短い。この場合には、正直に「I have never thought about the best sightseeing spots for a foreign traveler…」などと、質問を理解していることが分かる内容で話を始めて、同時に考えるということでもよい。受験者に第一に求められるのは、話すことで試験官が英語力を判断できる材料を提供することである。したがって、上記の例に加えて、なぜ考えたことがないのかななどについての説明をしてもよい。

#### 4. サポートの改善案としての文字起こし

現在、IELTS 受験者およびサポートをする側のコーチングフェローにおいても、スピーキング・セクションの対策としては、本番と変わらず実際に話すということが最も重要であるという理解が浸透している。これはもちろん間違いではなく、実際に話すことによって多くの改善点に気づくことができる。ただし、これはスピーキングという音声に頼るものであるために、やはり深刻な短所も存在する。つまり、スピーキング練習を録音していない限り、実際に話す練習は一過性 (fleeting) のものに過ぎない。

スピーキング練習の際には、コーチングフェローがフィードバックをしたり、学生自身での自己評価や改善点などについて聞いたりするが、話者自身が何を話したのかを詳細には覚えていないことが多い。改善点を指摘しようにも、まずどのような発話が為されたのかという基本的な部分が音であり一過性のものであるために不確実である。するとフィードバックを行っても、自身が発話した記憶もないので、ピンとこないということが多々ある。

同時に、コーチングフェロー自身も主要な改善点などをすべて指摘できないという限界もある。例えば、内容に気を取られていると文法の間違いなどに対して意識が疎かになる。逆も然りである。また気付いても、サポートの時間の制約により本当に重要な点を数点しか指摘できずに終わることも多い。

スコア向上のためには、学生自身が練習の際の発話を覚えており、それを土台としてコーチングフェローによるフィードバックを理解することが必要である。しかしながら、フィードバックも口頭で行われるため、聞き逃し等が起こる。学生がメモを取っていても、自主学習の際には記憶が薄れ、見直してもよくわからないということも生じ得る。結果として、スピーキング練習の度に、同じような指摘を繰り返さざるを得ない。

そこで筆者が提案したいのは、IELTS スピーキングの練習の一環として、実際に話したことを文字化すること (transcription) である (註15)。筆者が具体的に学生に求めることは、まず質問に答える自分の声を録音し、その音声の文字起こしをすることである。そして、自身で、語彙、文法、論理性において改善できるところを加筆修正する。その際には、各パートで求められるおおよその語数 (パート1は20から30語、パート2は200語、パート3は50語以上が目安となる) にまで分量を増やす作業も行う。文字化したものをコーチングフェローや友人知人に添削・フィードバックしてもらい、よりよい英文にする。そして最後には、自身の現時点での能力に沿った回答例が出来上がるので、それを基に流暢さ (ア

クセント、イントネーション、発音を含む）練習に使用できる。以上を踏まえた上で、対面式の練習を行うと、自身の長所と短所の客観的な把握が可能になり、短時間でのスコアアップにつながる。（図2）

今日はスマートフォンやコンピュータなどを利用することによって、手軽に音声を録音・再生することができるため、上記の作業は録音機器と筆記用具かコンピュータがあれば場所や状況を選ばずに手軽に行える。また実際の試験をより忠実に再現するためには、（特にパート2については）録音の際に時間を計り、プレッシャーの下でどれだけのことができるのかを確認することも有効である。ただ、内容をより充実させることを目的としているときには、時間を計らずに「質問に十分に答えた」という状態になるまで話し続け文字化すると良い。スピーキング対策を始めたばかりの時期は、筆者は後者をすすめる。時間制限がない状態で質問に十分に答えられないのであれば、時間制限を設けても目標スコアに到達するだけの発話はできないからである。

自身の発話を文字化する利点は、発話の内容や質を自身で確認できることにある（Stillwell, Curabba, Alexander, et al. 2009）。発話中はよくできたと感じていても、実は沈黙が多かったり、言い直しに時間がかかっている、同じ単語や表現が複数回繰り返される、そして質問に答えていないなどの気づきが生じる。また、複数や三人称単数現在形の-s、時制についてなどの自身の凡ミスに気付くことが可能になる。つまり、文字化することは、自身の発話に対して客観的に分析する練習にもなる（Stones 2012; Lynch 2001, 2007）。

自身で気づくミスを修正した後は、スピーキングのそれぞれの評価基準に照らし合わせて、自身で加筆することができる。流暢さの基準の一つとなる分量の調整はもちろんのこと、論理性、語彙や構文などについて確認・変更をすることによって、IELTSスピーキングの評価基準の理解度の確認にもつながる。可視化した英文を自身で修正できなければ、試験当日の発話中に自己訂正や言い直しはできない。

もちろん、学生が文字起こしをした直後の原稿をコーチングフェローが添削することも可能だが、必要最低限のコメントに限定されるため、自身で気づく範囲のものが添削範囲に含まれ折角の他者によるフィードバックの機会を無駄にして

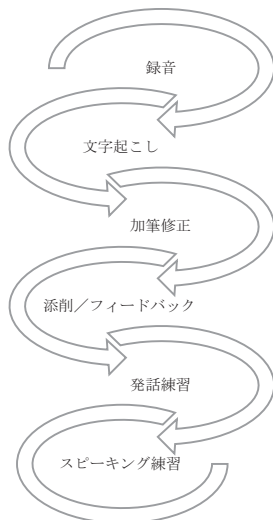


図2 スピーキングの可視化と練習過程

しまうことになりかねない。学生自身が、文章を加筆修正したものをコーチングフェローが添削することによって、より上質な回答例を作成することができ、学習の時間短縮にもつながる。また添削の際には、文法や語の間違いだけでなく、論理的展開への指摘や表現の代替案なども提案することができる。

文字起こしで音声を可視化する場合の欠点の一つとして、学生が加筆修正する際にライティングとして認識し文語体で表現することが挙げられる。ライティングでは代名詞でよいところを、スピーキングでは、誤解を生じさせないようにあえて具体的な名詞や固有名詞を繰り返す必要がある場合もある。しかしそのような点も、文字化された原稿であればフィードバックの時点で補うことが可能である。

添削された文章を見直すことによって、自身の間違いなどに気づき今後の発話に反映するのはもちろんのこと、自身専用の回答例を使用した音読練習も可能になる。パート2を例に挙げると、200語以上の回答を実際に二分程度で発話できなければ、いくら論理性を維持し語彙と構文に変化があったとしても、試験本番では流暢さに欠けるという評価をされる可能性がある。そのために口の筋肉を動かす物理的な練習を行うことで、加えてアクセントやイントネーションの練習も可能になる。ここで再度自身の音声を録音し、音、アクセント、イントネーション、間などの確認をするとよい。

この一連の過程を経ることによって、個々人に応じたフィードバックができる。市販の関連書籍やインターネット上の対策サイトは一般論に過ぎず、全ての受験者や状況に合うものではない。また回答例なども氾濫しているが、その回答例がどのバンドに該当するのかを明記していないものも多い（森川他 2014等）。また誤解されているが、回答例にバンドが明記されていたとしても、それらすべてを再現しないと同一バンドスコアは得られない。つまり、多くの受験者は、公式本の回答例を見て表現などを学ぶが、そのサンプルの中には間違いや不足が含まれるということは認識しておく必要がある（註16）。もちろん、回答例を分析することはスコアアップにつながるが、自身の発話に生のフィードバックを受けることで、短時間での効果的な学習が可能になる。

学生にとって、回答のしやすさや発話の質は問いの内容などによっても左右される。またスピーキングではセクションのバンドスコアの算出に平均値を使用することから、四つの基準のバランスも重要である。となると、一基準に特化するのではなく、全体の評価基準である一定の評価がなされるような細やかなサポートがなされることが肝要である。その様なサポートは、対面式の練習だけでは提供することはできない。



現在、コーチングフェローによるスピーキングのサポートは、30分間の一対一対面式練習という形をとっている。学生の授業や英語カフェの時間割の制約、コーチングフェローの業務の兼ね合いなどによって、週に限られた数のサポートしかできない。文字化したものを添削することで、対面式のサポート回数が少なくても、より高い効果を得ることができると考えられる。例えば、IELTS 試験日前の一、二週間に対面式のスピーキング練習を多めに行い、その他の週はスピーキング文章の添削と一回のスピーキング練習を組み合わせるなどである。もちろん、学生が作成した文面を全て添削することはできないし、する必要もない。最も大切なのは、学生が自主的に学習を行うことである。ただしその一方で、スピーキングやライティングはアウトプット型の作業であるゆえに、他者の目が入らないと短時間でのスコアアップが困難であるのも事実である。

もちろん図2は、「録音」、「文字起こし」、「加筆修正」、「添削／フィードバック」、「発話練習」、「スピーキング練習」の過程を一度たどって完結すべきものではなく、循環型に近いものとして捉えるべきである。図の下部に示したスピーキング練習の際に使用された質問を持ち帰り、新たに録音から始めてもよい。また発話練習をしたものをスピーキング練習に用いた後に、再度口頭でのフィードバックをもらうということも可能である。

要するに、スピーキング・セクションの対策は、対面式の練習に限られない。対面式の発話練習は、スピーキング対策についてのみ学ぶ場でも、唯一のスピーキング対策の場でもない。自主学習の成果発表の場であり、次へのステップアップ前の確認作業として活用されるべきである。

この発話の文字起こしは、スピーキングだけでなくライティングの練習にもなる。スピーキングのパート3はライティングのタスク2と類似しており、どちらも時事問題などに密接に関係している。ライティングの際は文語体を使用するという点や、タスクで求められることは違うが、ライティングの練習としてもスピーキングの文字起こしは役立つ。ライティングで求められる論理的首尾一貫性は、程度に差異はあるが、スピーキングでも求められる能力である。

本文ではIELTSスピーキングを例に挙げたが、同様の方法はTOEFL iBTのスピーキングにも役立つと筆者は考える。TOEFL iBTの独立型問題(問1と2)は、IELTSスピーキングと類似している。また統合型問題(読み／聞き／話す、聞き／話す)の場合も、パッセージや音声のスクリプトがあれば、スピーキング文面をコーチングフェローが確認することは可能であり、IELTS対策と変わりはないものと考えている。

## 5. まとめと課題

日本の大学生が中長期間（半年から一年）にわたり交換留学に参加するためには、多くの場合 IELTS または TOEFL iBT いずれかの非母語話者向け英語能力試験を受験し、スコアを提出する必要がある。これは本学多文化社会学部においても同様である。そしてそれらの試験において語学力を証明するに値するスコアに到達するためには、並みならぬ努力が必要である。

本稿では IELTS のスピーキング・セクションを例に、コーチングフェローがこれまで約一年半の間に行ってきた IELTS 向けのサポートを詳しく述べた（註17）。まず IELTS スピーキング・セクションのパート毎に問題形式を確認し、次に評価基準を概観した。これを踏まえ、第三章では学生に頻繁にみられる回答傾向とバンドスコア向上のための対策サポートについて説明を加えた。最後に、スピーキングだけでなくライティング力にも効果のある発話の文字化を提案した。音声を文字化し加筆修正することは、学生自身でできる学習法であるとともに、友人・知人やコーチングフェロー等他者のフィードバックがあると、自主学習が難しいとされるアウトプット型のスピーキングを比較的短時間でブラッシュアップできるという利点がある。文字化する際には、スピーキングの特質を無視しライティングとして扱ってしまう危険性もあるが、その点は他者によるフィードバックで解消できる。

これから益々海外へ向かう学生が増え、英語能力試験のサポートの必要性も高まることが予想される中で、一層効率よく学生のニーズに沿ったサポートを提供することが求められる。そして試験対策といっても、画一的なものではなく、問題形式や学生個人により柔軟な対応が求められる。試験形態、学習方法やモチベーション維持、受験時期などの試験に係るより広いサポートが、間接的に学生の海外留学を実現することにも寄与する。そして、学生にとってより身近な存在であるコーチングフェローこそ、これらのサポートに適役であると考えらる。

英語学習は、サポートされることを前提するのではなく、あくまでも学生が自主的に行っていくべきものである。またそれは、英語能力試験で自身の目標点数を達成したら完結するものではない。特に英語圏での中長期留学を成功させるには、留学出発までに継続して英語力の維持と向上に努める必要がある。本学部の学生が、引き続きコーチングフェローを積極的に活用してくれることを望む。

## 註

- (1) コーチングフェローには三種類あり（日本語、フィールドワーク、そして英語がそれぞれ

- 1、2、6名)、2016年12月現在、上級コーチングフェローを含む10人体制で学生のサポートを行っている。
- (2) 英語カフェは、実践的な英語力を習得、練習、維持するための場として、主にコーチングフェローによってほぼ毎日行われている。学生のニーズに合わせ、様々なトピックに沿ったものから、学術的な場面での必要な英語スキルを習得するためのもの、そして気軽に参加できるものまで多種多様に行われている。
  - (3) 平成28年10月時点で、留学中、帰国済、渡航が決定済みのものを含む。
  - (4) IELTS (International English Language Testing System) とは、英国の三つの組織 (ケンブリッジ大学英語検定機構、ブリティッシュ・カウンシル、IDP Education) が共同で運営する試験であり、本学部で交換留学に参加するためには二種類あるうちのアカデミック・モジュールを受験する必要がある。TOEFL iBT (Test of English as a Foreign Language, Internet-based test) は、米国の非営利団体 ETS (English Testing Service) が主催する試験である。
  - (5) 英語コーチングフェローによる2016年度後期のサポート対象は、対面式のスピーキング練習とライティング英文の添削の二種類である。2016年12月28日時点でのサポート実績は、スピーキング36件 (IELTS 33件、TOEFL iBT 3件) とライティングが12件 (IELTS 11件、TOEFL iBT 1件) だった。ライティング添削は、データで提出されたものをワードの変更履歴およびコメント機能を使用している。その他の詳細については、付録1を参照のこと。
  - (6) 2016年4月20日から12月28日まで筆者が担当した、IELTS および TOEFL iBT のサポート延べ299件に基づく。これらには、ライティング英文添削、アウトラインのチェック、対面式スピーキング練習、そして学生によるスピーキングの文字起こし原稿の添削が含まれる。件数は、ライティングのタスク1および2それぞれ一問を一件、対面式のスピーキング練習一回を一件、そしてスピーキングの文字起こし原稿は、パート2の回答一つを一件、パート1と3については質問の数にかかわらず、提出ファイル一つを一件と換算している。詳細な内訳については、付録2を参照。対面式スピーキング練習以外は、原則として、データで提出されたものをワードの変更履歴およびコメント機能を使用して添削・フィードバックを行った。
  - (7) 学部長裁量経費プロジェクト (2016年8月から2017年3月) のうち「教育・社会貢献プロジェクト」に該当し、「英語能力試験のための総合的サポートに向けた出題形式の比較」と題し IELTS、TOEFL ITP、TOEFL iBT、TOEIC の問題形式の比較を行っているものである。(TOEFL ITP は、TOEFL Institutional Testing Program の略で団体向けテストであり、本学部が英語力測定尺度の一つとして採用しているものである。TOEIC は、Test of English for International Communication の略で、TOEFL と同様に ETS が開発等を行っている。)
  - (8) 2016年度の IELTS 集中講座は、2016年8月22日から23日の二日間にわたって開催された。
  - (9) 第二章の IELTS スピーキング・セクションの概要および評価基準については、ブリティッシュ・カウンシル (2015、2016) より。

- (10) 筆者が2015年11月に受験した IELTS 問題を再現した。
- (11) 2016年 8月22日に筆者が行った、IELTS 集中講座内でのスピーキング対策の資料より。
- (12) ライティングのタスク 2でも、同様の時事問題などに関する質問が出題されるので、ニュースや新聞を日常的に読んでおくといふ。
- (13) IELTS の公式サイト（英語版）では、英語ネイティブという表記は見当たらない（IELTS（英語版）ホームページ[最終確認日2016年12月29日]）。ただし英検協会は、英語ネイティブを採用している（英検協会 IELTS ホームページ [最終確認日2016年12月29日]）。
- (14) 図 1と同様に、筆者が2015年11月に受験した際の質問を再現したものである。
- (15) スピーキング音声の文字起こしをした原稿の添削は、英語コーチングフェローによるサポートには含まれていない。また、筆者のサポートにおいても実施の有無は学生の自主性に任せているため、実際に文字起こしを行い提出する学生は少数にとどまる（付録 1 および 2 参照）。
- (16) これまでの筆者の経験から、目安として目標とするバンドスコアの2.0程度上の回答例を参考にするとよい。
- (17) 本稿では IELTS スピーキングに焦点を絞ったが、TOEFL iBT スピーキング（独立型の質問）の練習際にも類似した特徴がみられる。そのため、IELTS と同様な対策が TOEFL iBT のスピーキング・セクションの対策として効果があると考えられる。

## 参考文献

- Achirri, K. (2015). *IELTS Examiner's Tips: An Academic Guide to IELTS Speaking and Writing*. CreateSpace Independent Publishing Platform.
- Bailey, S. (2014). *Academic Writing: A Handbook for International Students*. Abingdon, Oxfordshire: Routledge.
- IELTS <https://www.ielts.org> (2016. 12. 29アクセス)
- Lynch, T. (2001). Seeing what they meant: transcribing as a route to noticing. *ETL Journal*, 55 (2), 124-132.
- Lynch, T. (2007). Learning from the transcripts of an oral communication task. *ELT Journal*, 61 (4), 311-319.
- Oshima, A & Hogue, A. (2006). *Writing Academic English* (4<sup>th</sup> ed.). New York, NY: Pearson Education.
- Stillwell, C., Curabba, B., Alexander, K., Kidd, A, Kim, E., Stone, P., and Wyle, C (2009). Students transcribing tasks: noticing fluency, accuracy, and complexity. *ETL Journal*, 64(1), 445-455.
- Stones, T.P. (2012). Transcription and the IELTS speaking test: facilitating development. *ETL Journal*, 67(1), 20-30
- ブリティッシュ・カウンシル (2015) 「IELTS プリティッシュ・カウンシル公認問題集」(旺文社)
- ブリティッシュ・カウンシル (2016) 「IELTS プリティッシュ・カウンシル公認本番形式問題 3 回分」(旺文社)

- 萱忠義&ハッチェル・ジェイソン (2015) 「はじめて受ける TOEFL テストパーフェクト英単語」(桐原書店)
- 森川セーラ、ハリントン・ルーク、平岡麻里(2014) 「IELTS 完全対策&トリプル模試」(DHC) 多文化社会学部 <http://www.hss.nagasaki-u.ac.jp/> (2016. 12. 29アクセス)
- 田岡千明&小谷延良(植田一三 監修、上田敏子 編著)(2016) 「IELTS スピーキング・ライティング完全攻略」(アスク出版)
- 日本英語検定協会 IELTS <http://www.eiken.or.jp/ielts/> (2016. 12. 29アクセス)
- 林功&小玉英央 (2016) 「IELTS 必須英単語4400」(ベレ文庫)

## 付録

付録 1. 英語コーチングフェロー (CF) による IELTS/TOEFL iBT サポート体制<sup>\*1</sup>

サポート時期	担当 CF	サポート内容
2015年度後期 (春季休業を含む)	片岡	ライティング添削 (アウトラインのチェックも含む)
2016年度前期 (夏季休業を含む)	片岡	ライティング添削 (アウトラインのチェックも含む) 対面式スピーキング練習 <sup>*2</sup> スピーキング原稿の添削
2016年度後期 (特例サポートを 除く)	英語 CF <sup>*3</sup>	対面式スピーキング練習 ライティング添削  サポートを受ける条件として、英語カフェに週平均 2 回の参加を必要 <sup>*4</sup> とし、条件を満たすと週にスピーキング練習 3 回およびライティング添削 2 件までのサポートが受けられる。12/19 (月) からは、出席回数ではなくポイント制が導入され <sup>*5</sup> 、2 ポイントで 1 回のサポートを受けられる。ただし上限は、週にスピーキング練習 3 回およびライティング添削 2 回である。
	片岡 <sup>*6</sup>	ライティングのアウトラインのチェック スピーキング原稿の添削
2016年度後期 特例サポート 11/10 (木) から 11/25 (金)	片岡	ライティング添削 (アウトラインのチェックも含む) 対面式スピーキング練習 スピーキング原稿の添削  12月上旬にある中長期留学の出願締め切り前最後の IELTS が11/26 (土) に福岡であったため、2016年度後期に導入された英語コーチングフェローによるサポートの条件を満たしていなくても、11/19 (土) および11/26 (土) に受験する学生を対象に実施された。

<sup>\*1</sup> 2015年10月1日から2016年12月28日のデータに基づく

<sup>\*2</sup> 週に 3 回を上限とし、1 回30分程度。ただし夏季休業中については、1 回45分程度。

<sup>\*3</sup> 2016年度後期採用の 1 名を除く 5 名で担当 (筆者を含む)。

<sup>\*4</sup> テーマ別で実施される英語カフェを 1 回、実施形態が比較的自由的オープン・カフェ等を 0.5 回と換算。

<sup>\*5</sup> テーマ別で実施される英語カフェを 1 ポイント、実施形態が比較的自由的オープン・カフェ等を 0.5 ポイントと換算。

<sup>\*6</sup> 英語 CF によるサポート対象に含まれないその他のサポートを行った。



付録2. 筆者による IELTS および TOEFL iBT 対策サポート件数

サポート内容	2015	2016	
	後期	前期	後期
スピーキング（対面式練習）			
IELTS			
パート1	—	29	1
パート2	—	60	6
パート3	—	12	7
パート1と2	—	7	1
パート2と3	—	13	11
パート1から3	—	15	5
TOEFL iBT			
独立型	—	2	7
統合型	—	1	0
小計	0	139	38
スピーキング（文字起こし原稿の添削）			
IELTS			
パート1	—	0	2
パート2	—	26	12
パート3	—	1	1
TOEFL iBT			
独立型	—	1	4
統合型	—	0	0
小計	0	28	19
ライティング（英文添削）			
IELTS			
タスク1	12	12	7
タスク2	14	11	6
タスク2 アウトライン	0	5	3
TOEFL iBT			
独立型	0	1	2
統合型	0	2	0
小計	26	31	18
学期合計	26	198	75
担当合計件数		299	

- ・2015年10月1日から2016年12月28日のデータに基づき、2016年11月10日（木）から11月25日（金）の期間に実施した特例サポート、2016年度後期に筆者が行ったスピーキング原稿の添削、ライティングのアウトラインチェックも含む。
- ・2015年11月14日に筆者がIELTSを受験したこともあり、2015年度後期から個別にサポートを開始した。同じ理由から、2015年度後期については、ライティング添削のサポートのみだった。
- ・IELTSは各セクションが独立しているが、TOEFL iBTでは「独立型 (Independent Task)」と「統合型 (Integrated Task)」と呼ばれる出題形式をとっている。後者の統合型の問題は、読み／聞き／話すなど複数の技能を行って解答するもので、ライティングとスピーキングのセクションに見られる。